

北海道民話の研究(その2)

— 中田千畝『アイヌ神話』の考察 —

阿部敏夫

目次

はじめに

第1章 中田千畝『アイヌ神話』について

- 1) 体裁
- 2) 構成(目次)
- 3) 人脈
- 4) 発行の背景

第2章 中田千畝の略歴と業績

第3章 中田千畝と『童話研究』『旅と伝説』

第4章 中田千畝の著書について

第5章 まとめ

はじめに

北海道民話の研究⁽¹⁾には、アイヌ民話の研究は欠かせない。アイヌ民話研究というと金田一京助、久保寺逸彦、ジョン・バチェラー、知里真志保、萱野茂、藤村久保、中川裕、奥田統巳各氏をはじめとする研究がある。

また、これらの方々とは異なった姿勢でアイヌ民話研究・再話活動に関わった人達がいる。大正期から昭和20年代にかけて特に新聞記者という立場にあった人達は、その情報収集・時代的関心等からアイヌ民話に関わる機会が多かったと考えられる。例えば、東京朝日

新聞社・青木純二『アイヌの伝説と其の情話』大正13年札幌・富貴堂、小樽新聞社・工藤梅次郎『アイヌ民話』大正15年小樽・工藤書店、北海道毎日新聞社・河合裸石『熊の嘯き』大正4年東京・求光閣書店他の仕事を挙げることが出来る。これらの仕事を検討するとどうもアイヌ民族が伝承してきた民話とは異なるのではないかということに私は気づいた。その検討を青木純二『アイヌの伝説其の情話』から始めた⁽²⁾。

本論は、報知新聞社・中田千畝『アイヌ神話』について考察する。私の課題意識は1、中田千畝がアイヌ民話にどんな関心を持っていたのか 2、その後中田千畝はどのように民話に関わって行ったのか 3、その結果、中田千畝の目指していたアイヌ民話観はどのようなものであったのかということである。そのために中田千畝の生涯とその業績を探り、『アイヌ神話』への関心が中田にとってはどのような位置を占めるのかを探りたい。

第1章 中田千畝『アイヌ神話』について

1) 体裁

東京・報知新聞社出版部 定価1円20銭
1924年(大正13)6月28日発行

157頁; 19cm

口絵; 4葉(アイヌの家と老夫婦・アイヌの女・アイヌの男・アイヌの若き婦人)

キーワード: 中田千畝, 童話研究, 旅と伝説, 報知新聞社, 外務省情報部

2) 構成(目次)

第1章 アイヌ種族

アイヌは何処から来たか・アイヌの遺跡・
アイヌの名

第2章 アイヌ神話

第1 種族の秘史 [筆者注; 7話]

天地創造・人間祖神・シノッベツの戦・
日の神を救ふ・国土の飢饉・魔女岩降姫・
始祖昇天

第2 アイヌの伝説 [筆者注; 26話]

トイヘクンラの鬼神・悪木ニタケネニ・
怪魚モシリイッケチエブ・トカプチップ
カムイの死・月の神夫を訪ふ・月の神愚
かなる子を怒る・鳥の偉功・諸神の降下・
怪魔神・オキクルミ・愚かなるカワウソ・
熊の子孫・鷲と神女・天より降りたる家・
葡萄の移植・女の毛髪・女神悪血に病む・
魔女蛙となる・雀酒をかもす・小さき神々・
女神クナウ・雲雀と神・神童と魔の子・
黄泉国・悪神人肉を善神にすすむ・悪鬼
トパットツミ

第3 北海道の地名と伝説 [筆者注; 107話]

女神業を怠る・大鉞岩の伝説・シコッ
ト沼の怪魚・石狩の説話・蛇川の伝説・
フリ鳥の事・鬼神ニツネの事・神居古潭
の名・墳墓川の説話・シオマナイの説話・
神楽場の事・盗賊の処・宝物を忘れた磧・
軍勢を出したる処・死人の淵・大力の神・
神が槍を作った処・土を食ふ沢・神の越
す処・殺生石・悪魔神の居所・難破した
る処・バクカイシュマの説話・女神の沢・
乳房川・海神凍へて岩となる・婦女の走
る処・偽路・髑髏の川・暗川・使者論争
の地・老貂の肉を配った処・境界争ひの
処・幽霊の川・顧沼の説話・軽石を削り
だす神・夫婦場・餓死の処(椀を焼いた
処)・アトカニの説話・オйнаウシの説
話・ニラスの伝説・地獄の口・鮑の涙し
たる処・神葎の処・大空の沢・追及の処・
鮮雪の処・神庭・互に見合す山・焼柄岩・

臀凹の処・鷗の処・鋭山・穴居の処・悪
手にて水を汲む処・山上に船を見つけた
処・鍋を作る処・角多き処・衣物を焼き
たる沢・坑の沢・私生の子・親交の処・
履焼場・魚串の処・鯨鼻の処・赤蝉・恐
川・宝物を與へた処・火を取りし処・食
物入り来れる処・幽霊・夫婦崖・海死・
陥沼・炭川・腐川・鴉神船を導く・桶川・
踊女樹となる・樺液をとつた処・酋長の
倉庫・神鳥の水をのむ処・水上を通行し
た処・口真似処・鍋ある所・櫂を置きた
る処・星川・糞尿を投じたる処・犬川・
糠岬・鼻を落した処(アイヌの刑罰法)
・相話す川・大洪水に山を射る・神の酋
長の処・サル人の沢・運土山・杯山・颯
風の処・死者を哭したる処・手玉石・神
舟ある処・畑作りの処・屍の流れた処・
燧石の処・チバシリの神話・幕を張った
処・鳴る処

アイヌのクマ狩とクマ祭(付記)

上記のように『アイヌ神話』には神話7話、
伝説133話が収録されている。1つ1つの民
話の出典が明示されていないため出典の本文
と中田の再話との比較検討が出来ない。「自
序」に記述されている参考文献を手掛かりに
中田の編纂意識を探るのが今後の課題である。
なお、中田の課題意識は、「自序」の記述か
ら見ると、アイヌ民族とその文化、アイヌ民
族と大和民族の関係についてである。

3) 人脈

中田千畝『アイヌ神話』には、徳川義親⁽³⁾と
ジョン・バチェラー⁽⁴⁾の二人が「序」を書いて
いる。徳川義親は「彼等の謡ふ歌は、かうし
た美しい自然に抱擁され、自由な天地に育
てられた醇樸な心から、湧き出す美しい自然
のまゝの詩なのです。それをきく時、彼等の
思想も、人生観も、自然をどう見てゐるか
といふ事も、またどんなに美しいやさしい心

を持ってゐるかといふ事もよくわかります。悲しいことに自然の寵児も文明の風にふきさらされては堪え得ずして、やがて亡び行く運命にあるのです。彼等は我々より古くこの土に住み、我々の遠い祖先の昔からゆかりの深い友なのです。厚い同情を注がずには居られません。中田君の著はされたこの『アイヌ神話』が、これにより彼等を理解し、同情するのにどれ程役立つものかといふことは、こゝにいふまでもないことでせう。」

また、ジョン・バチュラーは「私は友人中田君よりその著アイヌ民族に関するものに、私の小序を乞はるゝ多大の光栄に浴し、直に君の所望を快諾した。蓋し、この最も興味深き民族に繋がる問題を明かにする文書の公刊さるゝことは、常に私の歓喜の根源の一つであるからである。……また読者は、アイヌ民族の起源とその隣保日本人との相互関係に就て書かれたを見て、多大の感興を唆らるゝことであらう。……純粹のアイヌ民族は、旧世界の一大白哲人種の後裔なることが明かなりとすれば、今日の日本人は蒙古若くは馬末族であるとは考へられなく、その血管にはアイヌ及び白哲人種の血が混流して居るのではあるまいか。」

中田千畝は [自序] において徳川義親の上記の疑問に「もし詳しく歴史を見ますならば、公爵のこの言を私たち誰もが、成る程と思ふであらうと信じられます。」と言い、「日本歴史の神代の頃に、この大八島に大和民族以外の先住民族が住まっていた事は、スサノヲの尊の物語りによつても極めて明瞭です。神武天皇の御東征も、またその先住民族との戦ひであった事はいふまでもありません。この先住民族をエゾと呼び、またはクマソといひ、ツチグモと呼んだとはいへ、それ等が現在のアイヌ族の祖先である事は、何の疑ひもない事と思ひます。」「かうして私たちの遠い昔の祖先は、アイヌと深い深いかゝわりをもって

ゐたのです。現に私たちの住まっていた地それは、アイヌの祖先の住まっていた処です。」「単に亡び行く人種の持つ悲哀を思ふだけでも、その心情に深い同情を持たないではゐられないではありませんか。まことに彼等アイヌは、わが大和民族の先住種族であったのです。さうして現在においては、同じく皇国の国民の一人一人となつてゐるのです。かう考へて来る時、私どもの心には彼等アイヌへの同情の思念が赤く燃えたつのが当然でなければなりません。彼等が語る彼等の歴史、彼等がうたふ説話、それはとりもなほさず我国古代の歴史であり、説話であるのを思ふ時、私たちはそれを聞いて、限りないなつかしさを感じずには居られないではありませんか。」「私が熱望するアイヌへの同情が、親愛が、少しづつでも芽生えてくれるなら、どんなにうれしいかしれないのです。」

上記のように中田は、徳川義親やジョン・バチュラーをアイヌ民族への「同情者」として見ている。そして、自分もまた同様であることを記述している。日本建国の先住民族としてアイヌ民族を断じている。中田が以後新聞記者の傍ら「神話・童話・噺」研究者として活動するが、その原点が『アイヌ神話』にあると考える。

尚、中田は「凡例」において「アイヌの説話は文字をもって継承されたものではなく、ただ僅かに口承によるため異説誤伝のあるであらう事は明かであるが、さていづれが正しくいづれが否であるかといふ事になると断定する事は出来ないのである。よつて力めて異説をも掲げる事とした。また他の神話即ち古事記、ギリシャ神話等に類似する点の四五を参考のために記述した。…アイヌ語の語義についても種々なる異説あるものもあつたが、それは主としてジョン・バチエラー博士の日英夷辞典によつた。」と説明している。そして、以下のように主なる参考文献を記述している。出版当時の学問的成果を中田なりに咀

嚼して記述している。だが、前節2)でも指摘したように本文中の神話・伝説の出典は明示されていないので、前述の通り133話すべてについての参考文献と再話の比較検討については、今後の課題として残っている。

- ・ ジョン・バチエラー著
『日英夷辞典』『アイヌ人及其の説話』
『アイヌ地名考』
- ・ 北海道庁編
『北海道夷蝦語地名考』『北海道史』
- ・ 佐々木長右 [筆者注：左?] 衛門氏編
『アイヌの話』
- ・ 金田一京助著
『アイヌ聖典』
- ・ 金沢庄三郎博士著
『言語に映じたる原人の思想』
- ・ 鳥居竜蔵博士著
『有史以前の日本』

4) 発行の背景

中田千畝『アイヌ神話』は、大正13年6月28日に出版された。前年の関東大震災の復旧が十分なされていない状況下で出版されている。『世紀を超えて一報知新聞百二十年史』⁽⁵⁾によれば、中田が『アイヌ神話』を出版した時期は報知新聞社の絶頂期だった。その編集局で『アイヌ神話』の「自序」(大正13年春)を書いている。第一次世界大戦・関東大震災に遭遇した日本人は、世界・アジアへの対応・日本の復興を考えざるを得なかった。そして、日本国及び日本人の存在意義を問うことをせざるを得なかった。その潮流の中に中田千畝もいた。中田を取り巻く状況についてはその在籍していた報知新聞社史の大正2～15年のハイライトの項には次のように書かれている。

第8章 社運隆盛、東洋一を誇る

大正時代は報知新聞の絶頂期だった。

時代を象徴する第一次世界大戦と関東大震災は、新聞各社の命運を左右した。

第一次大戦は世界地図を一変させ、“遅れてきた日本”経済をかつてない繁栄に導いた。同時に戦争は新聞を発展させる。戦況の報道、各国の外交戦、ロシアに起きた革命、お隣の中国との関係などが、国民の身近な問題となったのである。本紙もこれに対応して報道に万全を尽くし、発行部数はうなぎ登り、大戦末期には三十数万部と東都一を誇るにいたった。関東大震災は、新聞界の地図を変えた。東京の日刊紙十七のうち、被災を免れたのは本紙と東京日日、都の三紙。東日と、焼けはしたが大阪に本社をもつ東京朝日の三つどもえ戦が始まった。ここでも本紙は輸入用紙の到着という重なる幸運に恵まれた。震災前に三十六万といわれた部数は、翌年正月には七十二万部と倍増、「東洋一」を豪語した。

しかし本社の発展も、ただ幸運に恵まれただけではなかった。この時代前半期は、相次ぐ記事削除、発禁処分を被りながら、藩閥・元老・官僚政治に抵抗し、「独立不羈」「不偏不党」を社是に論陣をはり、国民大衆の大きな支持と信頼を獲得したこと。さらに、これまでも力を入れてきた大相撲報道への新工夫の数々、駅伝、マラソン、自動車レースの創設など、事業にも意欲的なアイデアを次々に打ち出し、実行した努力が実った。

震災に際しても、家庭、家族を顧みる暇なく、社屋を火の手から守り、焼け跡での取材、謄写版刷りの壁新聞など、全社一致の活躍があった。

この大正期には、本社同人の大隈重信と記者出身の原敬が相次いで宰相を務めた。

第2章 中田千畝の略歴と業績

中田千畝の略歴については、『日本児童文学大事典第二巻』大日本図書株式会社1993年10月に詳しい。その他に雑誌『童話研究』日本童話研究協会 第6巻3号 昭和2年5月5日、東京・新聞研究所発行 『名鑑』大正

十三年版, 大正十四年版に中田が紹介されている。

中田千畝 (なかたせんぼ)

1895 (明28) 年3月15日~1947 (昭22) 年1月15日。新聞記者, 作家, 口承文学研究家。本名豊。山梨県北巨摩郡江草村生まれ。山梨民報をへて1918 (大7) 年報知新聞社に入社。小田原支局主任, 仙台支局長を経て1922 (大11) 年編集局に入る。1924 (大13) 年編集局庶務兼連絡部 (30歳), 1925 (大14) 年編集庶務 (31歳) [当時住所・府下大森新井宿沼521]

新聞記者をしながら童話の創作と研究を行う。大正末から『童話研究』に, 昭和初めから『旅と伝説』に投稿。

1924 (大15) 年日本童話協会評議員。

1932 (昭5) 年 同協会理事。

1936 (昭9) 年1月 同協会終身特別会員
同 3月 同協会 参事。

日中戦争が始まると, 外務省情報部第1課に所属し, 「少年倶楽部」や「少女倶楽部」に, 偉人伝・時事解説・一口知識等を執筆。

また, 『童話研究』第6巻3号昭和2年5月5日には以下のように記載されている。

著書『アイヌ神話』『日本童話の新研究』『浦島と羽衣』等あり, また個人叢書『杜人雑筆』を刊行す。

単行本

『最新登山案内』日本評論社出版部1923 (大12. 7)

『アイヌ神話』報知新聞社出版部1924 (大13. 6)

『最新スキー術』共著報知新聞社出版部1924 (大13. 12)

『浦島と羽衣』坂本書店出版部1926 (大15. 12)

『和尚と小僧』坂本書店1927 (昭2. 4),

< 杜人雑筆: 第1篇 >

『日本建国物語』丁未出版社1931 (昭6)

『大将の少年時代』実業之日本社1938 (昭13)

『日本外交秘話』博文館1940 (昭15)

『黒潮につながる日本と南洋』郁文社1941 (昭16)

『南方外交史話』日本国際協会1942 (昭17)

『日泰関係と山田長政』日本外政協会1943 (昭18)

『きつちよむ話・和尚と小僧』共著未来社 (日本の昔話15) 1975 (昭50)

第3章 中田千畝と『童話研究』 『旅と伝説』

『童話研究』⁽⁶⁾への投稿・紹介

第5巻3号 1927 (大15. 8)

新刊紹介『日本童話の新研究』中田千畝著

第5巻4号 1927 (大15. 10)

「人間出生の神秘 (1)」

第5巻5号 1927 (大15. 11)

「人間出生の神秘 (2)」

第6巻1号 1928 (昭2. 1)

「人間出生の神秘 (3)」

「新刊『浦島と羽衣』を読む 蘆村居主人」

第6巻2号 1928 (昭2. 3)

「樹木や草から生れた人間 人間出生の神秘その四」

第6巻3号 1928 (昭2. 5)

「樹木より人間出生が何故信せられたか 人間出生の神秘その五」

「童話家名簿」に中田千畝の紹介がある。

第6巻4号 1928 (昭2. 7)

「卵から生れた人間 人間出生の神秘その六」

第6巻5号 1928 (昭2. 9)

「日本神話伝説に於ける逃走説話の型」

- 第7巻1号 1929 (昭3. 1) *筆者注; 第7巻4号~第8巻1号記
「イソップ閑話」 事を収録
- 第7巻4号 1929 (昭3. 7) 第16巻6号 1936 (昭11. 6)
「日本童話略史」(一期~三期) 「十五週年を祝ふことば及び當来の童話
界に対する希望」
- 第7巻5号 1929 (昭3. 9) 第21巻1号 1941 (昭16. 1)
「日本童話略史」(四, 五期) 「慶祝2601年新春 名刺広告」
- 第7巻6号 1929 (昭3. 11) 以上
「日本童話略史」(六期~桃太郎)
- 第8巻1号 1930 (昭4. 1) 『旅と伝説』への投稿
「日本童話略史」(浦島太郎・大江山・
カチカチ山) 『旅と伝説』は, 1929年(昭3. 1) から
1944年(昭19. 1) までの第17巻第1号, 通
巻193号(三元社)の雑誌である。民俗学・
民話研究に足跡を残された藤沢衛彦・関敬吾・
伊波普猷・早川幸太郎・中山太郎・柳田国男・
折口信夫諸氏の発表の場でもあった。
- 第8巻3号 1930 (昭4. 5) 以下, 中田千畝投稿の号数・年号を掲載する。
「桃太郎の発祥地」[筆者注; 報知新聞
から転載]
- 第8巻7号 1930 (昭4. 10) 第1巻1号創刊号 1929 (昭3. 1)
『建国物語集』を読む 「牛に引かれて善光寺詣り」
- 第10巻4号1931 (昭6. 6) 第1巻第2号通巻2号 1929 (昭3. 2)
「童話界過去十年の展望 蘆谷重常」の 「河童の妙薬」
項に中田千畝の紹介がある。 第1巻第3号通巻3号 1929 (昭3. 3)
「明るき日本の建設に向って」 「吉右衛門噺」
- 第10巻7号1931 (昭6. 9) 第1巻第4号桜花号 1929 (昭3. 4)
「童話家と修養...諸名家」 「吉衛門噺(二)」
- 中田千畝の項 第1巻第5号通巻5号 1929 (昭3. 5)
(1) 古事記, 万葉集に関する新古各種 「吉衛門噺(三)」
の文献 第1巻第6号郷土玩具号 1929 (昭3. 6)
桃太郎その他日本昔噺に関する新 「日當山の侏儒噺(一)」
古各種の文献 第1巻第10号通巻10号 1929 (昭3. 10)
[筆者注; (1)は「貴下の愛読せら 「日當山の侏儒噺(二)」
るる書籍」(2)は「貴下の崇拜 「日當山侏儒噺(三)」
せらるる人物」で(2)の項は記 「日當山の侏儒噺(四)」
述がない。] 第1巻第11号通巻11号 1929 (昭3. 11)
- 第10巻8号 1931 (昭6. 10) 「小川未明氏を語る アンデルゼン以上」 「日當山侏儒噺(三)」
- 第12巻9号 1933 (昭8. 10) 「小波先生を偲ぶ会 思ひ出話」 第1巻第12号通巻12号 1929 (昭3. 12)
「蘆谷蘆村氏を稿ふ会 スピーチ(筆 「日當山の侏儒噺(四)」
者注)」 第2巻第7号通巻19号 1930 (昭4. 7)
1935 (昭10. 3) 「うきさ物語(一)」
- 『童話史 総合童話大講座 (上)』 第2巻第8号通巻第20号 1930 (昭4. 8)
「うきさ物語(二)」

第2巻第9号通巻第21号 1930 (昭4. 9)

「うきさ物語 (三)」

第2巻第10号通巻第22号 1930 (昭4.10)

「うきさ物語 (四)」

第2巻第11号通巻第23号 1930 (昭4.11)

「市兵衛噺」

第2巻第12号第24号 1930 (昭4. 12)

「市兵衛噺」

第4巻第11号第47号 1932 (昭6. 11)

「越後名所 貞観園遊記」

第7巻第2号第74号 1935 (昭9. 2)

「旅の随筆・汽車の音をなつかしむ」

中田は1929, 1930年 (昭3, 4) の2年間 (24号中15号) 上記のように精力的に投稿している。

第4章 中田千畝の著書について

第2章でも紹介したが、中田の著書を年月日順に見てみると以下ようになる。

1. 『アイヌ神話』 1924 (大13) 6. 28
2. 『日本童話の新研究』 1926 (大15) 6. 20
3. 『浦島と羽衣』 1926 (大15) 11. 27
4. 『和尚と小僧』 1927 (昭2) 4. 28
5. 『日本建国物語』 1931 (昭6)
6. 『大将の少年時代』 1938 (昭13)
7. 『日本外交秘話』 1940 (昭15)
8. 『蒙古神話』 1941 (昭16) 7. 25
9. 『黒潮につながる日本と南洋』 1941 (昭16) 10. 20
10. 『南方外交史話』 1942 (昭17) 6. 6
11. 『日泰関係と山田長政』 1943 (昭18) 3. 31

上記著書1～5は報知新聞社時代の執筆で、6～11は外務省情報部第1課時代の執筆である。この二つの時期の著書には、中田の民話に対する課題意識が変化している。

報知新聞社時代の著書は、以下紹介するよ

うな課題意識で執筆している。

- 『アイヌ神話』 - 「アイヌへの同情が、親愛が、少しづつでも芽生えてくれるなら」「アイヌは、わが大和民族の先住種族であった」(自序)
- 『日本童話の新研究』 - 「童話は実に古今未曾有の盛期に入っているのである。しかしながら、現在行はれてゐる童話の全部が、童話として童心の前に贈るに、正しい愛の贈物であるかどうか、童話作家の態度が、真に童子の前に忠実なる教牧者であるかどうか、教育者、又は父兄が、童話の何ものであるかをよく理解してゐるかどうか、かうした疑ひは容易にわたしの心から消し去る事が出来ないのである。わけても、日本の童話は如何にして胎生したか、如何にして発達して来たかといふやうな問題について、童話を説き童話を作る人々の多くが、余りにも無関心であるやうに見える事は、私の甚だ遺憾に思ふ処である」「日本人類の移動、日本の歴史といふ根源にまで遡って、印度、支那、朝鮮は勿論、台湾土人、南洋諸島民族、アイヌ族等の日本周囲の諸民族についても、一応の探求を行ふでなければ、その真の胎生及び発達の過程を知る事は不可能であると私は確信してゐる。」(自序)
- 『浦島と羽衣』 - 「神話伝説の研究が文化史研究のために欠く事の出来ないものである事は私の年来の主張であります。『浦島と羽衣』もかうした私の研究途上の貧しい一つの収穫であります。」(小序)
- 『和尚と小僧』 - 「まことに、我等の神話、伝説、説話は、我等の最も懐しき文化の母胎である。そこに私は無限の愛着と、敬虔なる祈りとを捧げる。しかしながら、我等の如く、神話伝説説話を愛好するものは甚だ僅かである。」(「杜人雑筆」について)

以上のことからわかるように、日本国内外の資料を駆使して民話理解の不足を嘆き、童話文化の必要性を熱望している。

しかし、日中戦争下の外務省情報部第1課時代になると著書6～11を通して見ると著書の内容もその課題意識も変化して執筆されている。

- 『蒙古神話』 - 「日本民族の文化の根源本来の姿を究明するためには、何よりも先に、日本神話の研究を為さねばならないが、同時に、我が国周辺民族の神話、説話民話等をも比較研究すべきである。すなはち、天孫民族と南方海洋民族との関係を明にするためには先づ南方諸民族の神話、伝説の比較研究が必要であると同様に、出雲民族の持つ文化の究明に当っては半島を南下したる蒙古、漢民族の神話、伝説の探求を絶対必要条件とする一、との結論を得た時からのことであって、爾来この方面に若干の研究を傾けたのである。(既刊の『日本建国物語』『アイヌ神話』等はこの研究の所産であった。)……然るに先年、支那事変の勃発によって、蒙古の地には蒙古連合自治政府が設立され、我が国の大業、東亜の新秩序建設に協力することゝなり、特に我が国とは親子、同胞の如き親善関係を持続することゝなつたので、この神話の整理を決意したのである。」
- 『黒潮につながる日本と南洋』 - 「特に大東亜共栄圏の確立といひ、東亜の新秩序建設といふ帝国の大理想は、此の御神勅を遵奉することにあらねばならない。換言すれば、この畏き御神勅こそ大東亜共栄圏の確立、太平洋和平確立の原理であるといはねばならない。真に、我々日本人の遠き大祖先は、日夜この御神勅を

遵奉して、常に大海原の宰制者の裔として、その神々に仕へまつれる神族の裔として、この太平洋上に、永遠の平和と、動きなき泰安とを築きあげて来たのであるが、その事実を、最も明確に証言するものの第一は、我が皇国の建国神話である。その第二は、我々の遠き父祖たちの間に、永く語り継がれたる伝説々話である。我々が、日本及び日本人のみの持つ、貴き伝承であると考へてゐる神話、伝説のそれと、因子を同じくし、語根を等しくすると信ぜられるものが、南洋諸島をはじめ、南方亜細亜の諸地方にも伝承されてゐるといふ事實は、高天原に栄えたる我々の遠き祖先が、太平洋の宰制者として、その永遠の平和と、安定とを図り、そこに、比ひなき文化を建設したことの事実を物語るものであつて、我々、日本及び日本人の輝やかしき功業であると共に、南方亜細亜および太平洋上に栄えつゝある諸民族にとっては、遠き昔の大和民族が建設したる貴き文化の流れを汲むものとして、共に俱に相携へて誇るべき榮譽であるといはねばならないのである。」(畏し 天神の御神勅)

- 『南方外交史話』 - 「本書は大東亜戦争に、歴史的、必然的論據を與ふると共に、大東亜共栄圏建設の歴史的根據を明示するものとして、真に有意義なる業績であると思ふ。」(序 外務省調査部長 田尻愛義)

「著者は昭和十六年初夏『黒潮につながる日本と南洋』一巻を公刊したが、本書はその姉妹篇をなすものである。即ち前著に於ては専ら神話伝説々話を通して、日本と南洋との間に切つても切れない血のつながりのある事を詳説したのであるが、本書に於ては専ら史実を通して、日本と南洋諸国並に西南亜細亜諸国夷との間に存したる、敦厚親睦なる交通交易の

情を明かにせんとするを目的としたものである。」(自序)

- 『日泰関係と山田長政』 - 「彼は遼人に対して、崇高なる日本建国精神と御稜威の畏さありがたさを説きあかし、天地の公道を教示した。また隣邦相倚り相援け共存共栄の実をあぐることの必要なる所以をも明に説き教へた。されば長政の渡遼後の遼国は、軍事、政治、文化等凡ゆる方面に飛躍的進展を遂げた。それ等の事實は歴史のよく明にする処である。長政は実に遼国に輝かしい歴史を作った英傑であるばかりでなく、タイ国をして現在、近代国家として東亜の天地に繁栄を築く基を樹てしめた偉傑でもあるとい得るのである」(自序)

中田は、日中戦争を機に外務省情報部に転属し、日本・南洋の文化的関連に就いて神話・伝説等の方面から意義づけようとした。その結果、大東亜共栄圏の思想的基盤づくりとして民話を見ていたことになる。

第5章 まとめ

- 1) 中田千畝について、野村純一氏は『日本童話の新研究』の覆刻版⁽⁷⁾の解説「危うい達成」に於いて、野村氏は中田の著書との出会い、鈴木堂三氏の中田についての説明を解説しながら、解説の末尾に次のように述べている。

「『日本童話の新研究』における中田千畝の意図と構想は、まず高木敏雄の『童話の研究』をさいこうせいし、拡充し、その上でなおこの国に行われてきた昔話や伝説を諸外国の資料と比較、対照しようとするにであった。すこぶる巨視的、かつ積極的な展望を抱いていたのである。しかるに反面、ここに千畝の陥穽は併せ存し、彼の資料処理の方法は

あまりに短絡、奔放に過ぎたかの感が深い。千畝の不運は客観的にはもちろん『新興民俗学の学統に参加』しなかったことにもよろうが、それ以前に一方で当時の彼がひとりあまりにも危うい達成を果たしていたことが大きかったと思われる。」

上記の野村氏の指摘は、本論の第1章、第3章、第4章報知新聞社時代で明らかなように「新興民俗学の学統に参加しなかった」中田が、独自の問題意識を追求して行ったことと関係がある。独自の問題意識とはすでに述べたように日本及び日本人とは何かということであった。だから「アイヌ神話・建国神話」に拘ったのではないか。また、児童の教化に活用しようとして拘った。

その結果、野村氏指摘の「危うい達成」すなわち外務省情報部時代の大東亜共栄圏の文化的根拠作りへと傾斜したと私は考える。

換言すれば、先住民族であるアイヌ民族に日本民族のルーツを見たのではないかと考える。この課題意識が『アイヌ神話』を生み出したと考えらる。

しかし、中田は「新興民俗学」の成果との関連で考察出来なかった。

- 2) 『アイヌ神話』以後の中田千畝の民話との関わりについては、本論第4章で詳述した通りである。
- 3) 中田千畝の民話観についての考察は、中田が採用した民話その出典についての比較分析の結果が必要である。今回は未着手である。
- 4) 以下、今後の課題を列挙する。

中田千畝(本名豊)自身の実践と思想形成を総合的に研究すること。

中田と『童話研究』の編集者・蘆村重常との関連について追求すること。

野村純一氏の指摘する「新興民俗学の学統」と「学統」でない者の問題意識の相違等について追究すること。

- 5) 「はじめに」で述べたように中田千畝や青木純二、工藤梅次郎、河合裸石、小谷部全一郎がアイヌ民話にとりくんだ「思い」を、日本近代史の中で捉えること。

[注]

- (1) 民話概念については、北星学園大学文学部『北星論集』第40号に言及している。その内容で私は民話という語句を使用している。
- (2) 青木純二『アイヌ伝説と其の情話』については、1993年度紋別市「環オホーツク海文化の集い」報告書に掲載されている。
- (3) 徳川義親は、北海道八雲町に農場を持っていた。アイヌ民族の良き理解者であった。中田の『アイヌ神話』に写真借用や助言を著者に提供している。
- (4) ジョン・パチュラーの研究成果を中田は踏まえて『アイヌ神話』を刊行している。ジョン・パチュラーについては、『アイヌ人と其説話』1924(大14)『ジョン・パチュラー自叙伝我が記憶をたどりて』1927(昭3)等の著書に詳しく紹介されている。
- (5) 中田千畝が在籍した当時の報知新聞社は関東大震災後の日本三大新聞の一つとして発展していた。報知新聞百二十年史『世紀を超えて』によると本文でも引用したように報知新聞社の絶頂期にある。本文200~219pにわたって詳しく記述されている。
- (6) 定期発行雑誌『童話研究』については、『日本児童文学大辞典第二巻』大日本図書株式会社発行1993、日本近代文学館編『日本近代文学大辞典第五巻』講談社1977に詳しく記述されている。
- (7) 『日本童話の新研究』は、1980(昭55)村田書店から覆刻された。付録として「羽衣伝説」「桃太郎物語に関する蒐集資料一覧表」も覆刻されている。

[主な参考文献]

- 『日本近代文学大辞典』講談社1977
『日本児童文学大辞典』大日本図書株式会社

- 『童話研究』復刻版全冊 日本童話協会
『旅と伝説』全冊 三元社
別巻(総目次・執筆別索引)岩崎美術社1977
『郵便報知からスポーツ報知まで
世紀を超えて一報知新聞百二十年史』
報知新聞社 1993

[お世話になった機関]

- 国立国会図書館・北海道立図書館
札幌市中央図書館・栗山町図書館
國學院大学図書館・北星学園大学図書館

尚、本研究は2002年度北星学園大学特別研究費による研究報告である。

正 誤 表

北星学園大学 文学部 北星論集 第41巻(通巻第41号)

頁・行目	誤	正
129頁 左段 下から 8行目	「萱野茂，藤村久 <u>保</u> ……」	「萱野茂，藤村久 <u>和</u> ……」